

令和5年度 県立水戸第一高等学校自己評価表

目指す学校像	○真理を愛する学問第一の校風の下、質が高く、活気ある授業や課題研究、社会と連携した教育プログラムを展開する学校 ○自主自立の精神を重視する自由な校風の下、生徒が何ごとにも主体的に取り組むとともに、中高・学年の枠を超えて切磋琢磨する学校 ○至誠一貫・堅忍力行の校是の下、豊かな人間性や最後までやり抜く力を育むとともに、高い目標に挑む生徒をしっかりと支援する学校			
三つの方針		具体的目標		
「三つの方針」 (スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	社会の変化に対応するだけでなく社会に変革をもたらす、グローバルな視点をもって茨城から世界に羽ばたく、高い志をもって地域医療をはじめ地域課題の解決を先導する、といった形で社会に貢献できる者を育成する		
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」 (カリキュラム・ポリシー)	難関大学や医学部医学科、海外大学への進学希望にも十分応える質の高い授業と学習支援・進路支援を展開するとともに、生徒が主体的に取り組む特別活動等を重視する		
	「入学者の受入れに関する方針」 (アドミッション・ポリシー)	○真理を愛する学問第一の校風を理解し、好奇心旺盛で、自ら定めた課題を深く探究しようという意欲のある生徒 ○自主自立の精神を重視する自由な校風を理解し、何ごとにも主体的に取り組む、多様な者と協働しようという意欲のある生徒 ○至誠一貫・堅忍力行の校是を理解し、人格を磨き、高い目標に向けて最後までやり抜こうとする気概のある生徒		
昨年度の成果と課題		重点項目	重点目標	達成状況
【成果】 令和4年度(2022年度)の重点項目に関する11の重点目標の達成状況は、Aが0、Bが11、Cが0であり、総括的には目標を達成できたといえる。Aが0というのは、評価を見直し、ABCそれぞれの基準を厳格に当てはめた上での評価である。 進学状況については、国公立大学・準大学の現役合格者数が157名、既卒者を加えた総数は224名となった。難関大学(東北・東京・名古屋・京都・大阪・東工・一橋)については、現役45名、既卒22名が合格した。東京大学は現役11名、既卒4名で、15名となり、一昨年ほどではないものの、昨年に引き続き健闘した。また医学部医学科合格者は、全国的に厳しい入試が続く中、国公立大学・準大学は現役12名、既卒11名の計23名、私立大学は現役5名、既卒19名と健闘した。入学直後の2カ月および2年生9月の臨時休校により、学習活動が十分に支援できなかったことが課題である。 特別活動については、コロナ禍にあっても、生徒の主体性を引き出し、感染対策とともに、新しい発想と工夫によって、活発な学校行事が展開できた。また、生徒会活動では、来年度の附属中学完成年度に向け、組織づくりや部活動でも連携を深めることができた。運動部活動では、体育館の長寿命化工事によって約半年間活動が制限されたが、間借りした近隣校への礼儀や、日頃の環境への感謝など、不自由さが故の良い効果も生まれた。		教育課程・学習支援の改善・充実	①新指導要領や大学入試改革への対応を進めるとともに、中高連携・教科横断で授業改善を図り、生徒の授業満足度を向上させる。	A
			②生徒全員がICT端末を有するBYOD環境が整ったことを踏まえ、教育・学習活動におけるICTの有効活用を図る。	B
			③科学オリンピックをはじめ、他校生と切磋琢磨する「他流試合」への参加を奨励し、活躍を支援する。	B
			④生徒の授業満足度90%以上	A
		進路支援の改善・充実	⑤難関大学(東大・京大・阪大・東北大・名大・東工大・一橋大)や医学部医学科をはじめ、生徒及び既卒生の第一志望実現を支援する。	B
		中高・学年の枠を超えた活動の推進	⑥附属中学校の完成を踏まえ、+4学年活動など中高連携での活動や特別活動の改善・充実を図るとともに、部活動改革を推進する。	A
		健康・安全の確保と法令遵守の徹底	⑦最後までやり抜く力の育成や教育相談環境の整備を図るなど、生徒の心身の健康・安全を確保する。	B
			⑧業務改善を進め、職員の心身の健康・安全を確保するとともに、法令遵守を徹底し、違反件数ゼロを目指す。	B
【課題】				
①科学技術系コンテストでの実績を上げるため、全校体制で科学探究指導を強化するシステムを構築する。②本校での学びを一層効果的に深めるため、授業改善推進チームを中心に引き続き教員研修の機会を設ける。③難関大学及び医学部医学科への進学実績は、昨年度大きな成果を上げたと言える。詳細な生徒把握と丁寧な進路支援がその主要因であると分析しており、引き続きそのノウハウの校内共有を進める。				

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A ○主体性を育む指導について更に研究する。 ○いっそうICT機器の活用をすすめる。 ○研修の機会を更に設ける。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果が高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A	
			B	
国語	国語の学習に対する意欲・関心を高める。	○授業方法を工夫改善し、教員相互に授業を公開するなど、教科内における研修等を行い、指導方法に対する研究を深める。 ○指導内容・方法・進捗について、各学年の担当者間で綿密に連絡する。 ○中高の連携を強化し、交流を通して相互の学びの意欲を高める。	A	A ○中高の連携を図る。 ○小テストのあり方等について研究を深める。 ○読書感想文コンクールへの応募が減少した。他の種類のコンクールについて研究し対応を図る。
	基礎学力の定着を図り、段階的に難関大学入学試験に対応できる学力の養成を図る。	○小テスト等によって基礎学力の定着を図る。 ○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方について研究を深める。 ○個別の添削指導を実施するなど、難関大学入試に対応できる文章読解力・表現力の養成を図る。 ○副教材・ICT機器を利用するなどによって、学習内容の深化を図る。 ○定期考査等基本・発展を取り混ぜた設問構成を工夫し、平均点50～60点台の問題を実施する。	A	
	自立的な学習を促し、豊かな言語能力を持った生徒を育成する。	○生徒の実態に即した課題の提示などにより生徒が自主的に学ぶ姿勢を育み、自立的学習の習慣を獲得させる。 ○読書意欲や創作意欲を喚起し、各種コンクールへの取り組みを奨励する。	B	
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B ○生徒の興味関心が高まるように、教科書の内容にとどまらず、大学の学問分野との関連を意識しながら、その魅力を伝えられるような授業を展開してきた。次年度はより生徒が主体性に取り組むことができるような授業の形態等について検討していきたい。 ○新課程に合わせた年間計画や授業展開についての検討を継続する。 ○電子黒板を利用した授業は定着している。今後は電子黒板のみならずタブレットをどのような場面で活用するのが有効かを検討していきたい。 ○新課程に合わせた年間計画や授業展開についての検討を継続する。 ○電子黒板を利用した授業は定着している。今後は電子黒板のみならずタブレットをどのような場面で活用するのが有効かを検討していきたい。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果が高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
			B	
地歴公民	綿密な教材研究や授業改善を図るとともに、大学入試問題の研究を継続的に行い、進路実現のための確かな学力を養成する。	○教員相互間での研修により専門性を高め、生徒の知的好奇心を喚起する授業の実施を目指す。 ○基礎・基本を徹底させるとともに、自ら思考する能力、資料を分析する能力、課題に取り組んでいく姿勢等を身につけさせる。 ○国公立大個別試験、難関私立大学試験、共通テスト等の分析を綿密に行い、授業、定期考査、校内模試等へ反映させることにより生徒の学力向上を図る。	A	B ○入試問題の検討や、生徒の添削指導なども教員間で共有し、より質の高い授業や個別指導を実施していく。 ○より高度な内容を学びたい生徒から、基礎・基本の振り返りの学習を必要とする生徒まで、多様な生徒の学習ニーズに応えられるような授業づくり・教材づくりに励む。 ○各科目とも、資料の活用、大学入試の二次試験問題、大学での学問研究を意識した探究活動など、深い学びを伴う授業展開を行った。定期テスト、実力テストだけでなく、入試問題も含めて教員間で検討することを通して、教員の力量を高めると同時に、生徒の力を伸ばしていく。 ○今後も教員個人のみならず、教員間でも研鑽を積み、より高い質の授業が展開できるように改善を継続する。
	教科研修の充実によって、教員の授業力の向上をはかるとともに、新学習指導要領、中高一貫教育、評価方法の研究を進める。	○科目担当者間での授業の進捗、指導方法など綿密な打合せを行い、課題意識を共有し、指導を充実させる。 ○ICT機器やソフトウェアの活用方法に対する研究を継続的に実施していく。 ○新学習指導要領、中高一貫教育に対する研究を継続的に実施していく。 ○生徒の学習活動・能力を的確に評価する方法の研究を実施していく。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
数学	各科共通 教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B ○入試情報に振り回されない確かな学力像を生徒自らが持てるように働きかける。 ○経験豊かな教員の数学教育の知見を吸収し、次世代にデジタル化して残していく。 ○教育課程変更後の入試に向けた力を生徒がつけることができるように、情報を共有する。
		○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
	授業に積極的に取り組ませるとともに、自主的に数学に取り組む態度を育成する。	○低学年では予習復習を励行させ、教科書内容を定着させ、入試に必要な基礎力の定着を図る。 ○学年の進行とともに課題の在り方を検討し、低学年では課題等の提出を習慣化させ、高学年では自主的学習に移行できるように促す。 ○学年担当者間の連携を密にし、教材の精選と授業内容の充実に努めるとともに、多様な見方・考え方を例示するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。 ○電子黒板などICT機器の実践事例やノウハウを蓄積し、職員間で共有し実践することで生徒の授業理解の深化を図る。	B	B ○新課程での教材は、教科書会社も試行的な編集が見られた。教材選択が生徒の学習に影響しないよう、ICTの関わった授業の進め方を十分に検討し、生徒自らが基礎力を定着できるようにする。
	進路実現のための学力向上を図る。	○考査・試験・課題の問題は学年全体で精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○大学入試問題等を日頃から研究し、積極的に授業に取り入れ、大学個別入試および共通テストに対応できる力をつけさせる。 ○大学入試問題分析会(有名難関大学)を実施し、入試問題研究や教材研究により教員のレベルアップを図る。	B	B ○新課程での入試になるため、引き続き外部の講演会も含めて情報収集し、教員間で共有していく。生徒に対しては実力試験、定期考査や章末テストでの問題を精選することで学習効率向上を狙って還元していく。
各科共通 教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	B ○生徒の主体的な取り組みを高めるような指導法・教材・教具の工夫をしてきたが、来年度もさらに一層工夫を進めていきたい。 ○内進生への指導についてしっかり検討し、既習内容の把握や進度の調節(高入生との差別化の有無)など、理科内部のみならず学校全体であらためて確認して進めていきたい。 ○生徒の授業に対する定着度を観察しながら、各科目において授業内容の充実に努めた。記述や議論などの生徒の主体的な活動についても、継続して取り組んでいきたい。 ○より効果的なICT機器の活用方法について今後も検討していきたい。 BYODが浸透していない場合があり、スマホで済ませようとする生徒がいるため、タブレットの持参を促していきたい。 ○本年度も新課程における観点別評価について検討を行ってきた。生徒の評価からみえてきた課題を共有し、授業時の指導方法の改善に活かしていきたい。
	○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	
	○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	C		
理科	知的な好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象について深く考察し、科学的な思考力・判断力・表現力を身につけられるように、観察・実験において主体的・対話的な学びの授業展開を工夫し実践する。 ○重要な図やデータの考察・理解にデジタル教材の活用を促し、知識の習得と整理がしやすくなるようにする。 ○最先端の科学技術について、授業内で適宜話題に出し、生徒に興味・関心を持たせられるようにする。	B	○生徒が科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けられるように、観察・演示・生徒実験を取り入れた授業を行い、レポートなども提出させた。来年度も、一層主体的・対話的な学びの場を工夫して実施し、生徒の科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けさせたい。 ○デジタル教材の活用についても、さらなる工夫を進めたい。
	確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた学力試験に対応できる学力の養成を図る。	○基本的な原理・法則の理解を深め、さらに問題演習を重ねることで学力の定着を図るために演習量を確保する。また、校内試験ごとに解答の見直しをさせ、基礎学力および応用力の向上を図る。 ○国公立大学個別試験、難関私立大学試験の分析、また、大学入学共通テストに対応できるよう担当教員間での報告・連絡・相談を密に行い、授業や定期考査等に反映させることで学力の向上を図る。	A	B ○校内試験毎にテストの見直しをさせ、基礎基本の定着を図ると共に、大学入試の動向を踏まえ、授業や考査にそれらを反映し、学力向上を図った。大学入学共通テストを意識した問題を授業に取り入れるなど、今後も入試に対応できる学力の育成に努めていきたい。
	新学習指導要領や大学入学共通テストに向け、研修の確保・充実に努め、教員の授業力向上・これからの時代に求められる教育のよりよい在り方に対する意識の向上を図る。	○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これから本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○主体的な学びや対話的な学びの過程で、ICTを効果的に活用する。 ○ICTの活用などに際しては、教員間でのノウハウの共有化を図るなど研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	○学習指導の在り方や観点別評価などについて話し合いを進めてきた。学習指導において各自が実践した結果を、互いに共有し検討し合って、学習指導法の改善に努めていきたい。 ○ICTの活用を進めてきたが、ICTの活用について理科全体でノウハウを共有できる機会を増やし、なお一層充実に努めていきたい。
	各種科学オリンピックにおける生徒の上位入賞を図る。	○各種科学オリンピックへの参加生徒を募り、上位入賞が実現できるよう指導の機会を設ける。	B	○各種科学オリンピック・コンテストの入賞を目指せる生徒を募り指導していきたい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
保健体育	各科共通	教科指導全般	A	<p>○生徒の主体的で深い学びにつなげるために各授業を通じて、生徒が互いに教え合うこと学び合うことを促進あいたい。進路実現に向けて健康面からも積極的にアプローチしたい。</p> <p>○指導内容を段階的、系統的に体系化を図り、生徒の伸長に寄与したい。</p> <p>○体育館のWi-Fi環境が整備されたことから、各種目において積極的な活用を図りたい。</p> <p>○各種研修会への参加や教科会を通じてより良い授業実施のため、改善を図り、生徒の主体的活動参加への契機としたい。</p>
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	B	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
	歩く会の高い完歩率を維持させる。	A		
	体力テストの底上げを図る。	B	<p>○伝統行事の「歩く会」の意義を理解させるとともに、9月の練習における暑さ対策、健康への配慮を第一に考えながらも体力の維持・向上を図っていききたい。</p> <p>○基礎体力の養成が体力の向上につながり、ひいては生涯全てのライフステージにおける心身の健康、豊かなスポーツライフの実践に繋がる点を理解させ、生徒への指導にあたっていききたい。</p>	
	授業時のケガ等の防止に努める。	A	<p>○基本的な運動スキルの獲得と安全面への配慮を念頭に、授業に取り組むようにする。基本的な運動スキルは運動技能を高めるだけでなく、怪我の防止にもつながり、安全面への配慮は事故の未然防止につながる点にふまえながら指導に努めたい。引き続き、感染症防止対策及び熱中症防止対策にも積極的に取り組んでいく。</p>	
	「保健」をとおして心身の健康の保持増進を図る。	B	<p>○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を行いたい。そのためには、グローバルな視点にも立ちながら各自の健康課題を積極的にとらえる指導に取り組んでいきたい。</p> <p>○ICTの効果的な活用方法についての研修を行い、実践に向けて準備する。</p>	
芸術	各科共通	教科指導全般	A	<p>○芸術分野の進路を選択する生徒は多くないが、各生徒が生涯を通じて芸術に関心を持てるような指導をしていきたい。</p> <p>○各科目の特性に合わせてさらに効果的なICT活用を目指す。</p> <p>○表現と鑑賞を同じ時間で進めるなどの工夫をしているがその他にも有効な手だてがあると思うので教材研究の際に考慮していききたい。</p>
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	A	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
		鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	A	
	自発的に、課題に取り組む姿勢を持たせる。	A	<p>○コロナ禍による実技の制限がなくなり、元来の指導内容に戻すことができている。次年度からも様々な実技指導を実施し生徒が自発的に活動する場を増やしていきたい。</p> <p>○個々の活動に加えグループやクラス全体での発表の機会をさらに増やし、作品や表現について他者と思いを共有できるようにしたい。</p>	
	新たな教材研究に努める。	A	<p>○趣向が多様化している生徒に対応できるよう教師側の知見も広げていききたい。芸術に関し常に敏感であるよう心がけたい。</p>	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	○授業アンケートの結果を指導に反映させさらなる改善を図る。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	○新教育課程下での大学入試に向けて、指導と評価の一体化や観点別評価、ICTを活用した授業について、教員間での連携を密にする。
			B	○教員間での情報交換や相互授業参観を積極的に行う。
外国語	1年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、実践的コミュニケーション能力の基礎と読解力および表現力を育成する。	○英語コミュニケーションⅠ:受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解し、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、主体的・自律的にコミュニケーションをとるための基本的な知識と技能を養成する。 ○論理表現Ⅰ:英文法を軸に、場面を意識しながら表現を学び、情報や考えなどを論理的構成に基づいて工夫して話したり、英作文等で適切に自己表現したりするための土台を育成する。 ○サイドリーダーや単語帳等の自主学習課題を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自立した学習者としての態度を涵養すると同時に、知識、理解力および表現力の基礎を養成する。 ○全体のボトムアップを図るとともに、個々の能力に応じた適切な教材を適切な時期に用いることで、学習への動機付けを助長する。 ○観点別評価に対応するための試験問題の作成や試験のあり方の検討、パフォーマンステストを通して、信頼性と妥当性のある客観的評価を行い、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を目指す。 ○1学年3月までに、CEFR A2レベル90%以上(220名以上)、B1レベル60%以上(150名以上)を目指す。	B	○全体的に見て、具体的方策で挙げた事項をほぼ達成したと考えられるが、観点別評価に関してさらに研究をする必要がある。とくに、指導と評価の一体化に関しては、生徒の学習に対する動機づけになるように、指導法および評価法の研究をさらに進めていきたい。 ○英語コミュニケーションⅠでは、授業中のペアやグループでの活動を重視して、バランスのとれた英語力を育成できたが、今後教材の難易度が上がることにに対する対応を、語彙や文法・語法、背景知識を必要とする英文読解などの面から、生徒の実態に合わせて工夫していきたい。 ○論理表現Ⅰでは、文字通り、論理的に英語を読み、論理的に表現するための土台を早期に築くため、文法や構文の指導を早期に終わらせた。その際、基本的な事項にしぼって全体像を把握させることを重視した。次年度以降、発展的な内容を扱う際にも教材の選択や学習事項の提示の仕方など、さらなる工夫をしていきたい。
	2年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、実践的コミュニケーション能力を育成する。	○英語コミュニケーションⅡ:検定教科書をベースに、受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解したり、自分の意見や考えを表現したりする能力を養成する。各レッスン終了後に、高難易度の読解演習を投入することで、最上位層への刺激を図る。 ○論理表現Ⅱ:目的・場面・状況を意識しながら既習事項の反復と新出表現を学び、スピーキングやライティングでそれを活用することや添削指導を通して、適切に自己表現するための知識や表現力を育成する。 ○サイドリーダー、総合問題集、ポスターディング等の自主学習課題を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自立した学習者としての態度を涵養すると同時に、理解力および表現力のさらなる伸長を図る。 ○定期考査・実力試験問題の改良やパフォーマンス評価を通して、時間、内容量ともに耐性を養い、信頼性と妥当性のある評価を行い、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を目指す。また、生徒が学習調整量を個々の能力と必要性に応じて調整できるよう、バックアップ体制を整える。 ○CEFRB1(実用英語技能検定2級相当)の生徒90%(約215名)、CEFRB2(同準1級相当)の生徒10%(約25名)を目指す。	B	○英語コミュニケーションⅡ・論理表現Ⅱともに、授業で扱う教材に緩急をつけ、平均層だけでなく、上位層も刺激することが出来た。CEFR B1・B2ともに目標値を達成し、継続的に外部検定試験に挑戦するなど意欲が高めることが出来た。 ○副教材に関しては、評価との関連性を明確することにより、主体的な学習態度を伸長することが出来た。 ○パフォーマンステストを導入することで生徒の表現力の伸長につながり、また、興味関心を把握することも出来た。 ○実力考査の問題量と時間を増やすことにより、テストそのものに対する耐性を養うことが出来た。 ○次年度に向けて、観点別評価を含めて引き続き評価のあり方を検討していく必要がある。また、生徒全員の希望進路実現に向けて、また、英語を通して生徒の興味関心を引き出せるように、さらに教授法や使用教材を研究していきたい。
	3年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、大学入試にも対応できる実践的コミュニケーション能力を育成する。	○コミュニケーション英語Ⅲ:受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、迅速かつ正確に英文を理解したり、自分の意見や考えを適切な表現で伝えたりする能力を養成する。 ○英語表現Ⅱ:目的・場面・状況を意識したライティングやスピーキングの活動、英作文の添削指導を通して、適切に自己表現するための知識や表現力を育成する。 ○長文読解問題集等の自主学習課題を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自立した学習者としての態度を涵養すると同時に、理解力および表現力のさらなる伸長を図る。 ○定期考査・校内模擬試験問題の改良やパフォーマンス評価を通して、信頼性と妥当性のある評価を行い、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を目指す。 ○CEFRB2(実用英語技能検定準1級相当)の生徒15%(約40名)、CEFRB1(同2級相当)の生徒100%を目指す。	B	左記の目標については、授業内の言語活動、スピーキングテストを含む校内試験、外部試験(検定試験・模擬試験)などから、おおむね達成できていると考えられる。 観点別評価を含む新教育課程での指導、本校附属中学校卒業生と他中学校卒業生の指導など、新たな変化に対応しながらも、引き続き生徒の総合的な英語力を育成することが次年度の課題である。また、英語の授業や生徒の自主学習におけるICT機器や生成AIの適切な使用方法の研究していきたい。さらに、既卒生についても、希望進路の実現に向けて支援していく。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題	
家庭	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	○将来に向け一人ひとりが主体的に取り組めるように、用具の整備や2展開の授業を実施した。次年度は中高の授業計画を見直し、実習室の使用方法等の両立を確立していきたい。 ○場面に応じた教材や指導方法、ICTの活用法の検討を十分に行うことができた。データ化するプリントを増やしたりなど、よりオンライン対応も視野に入れて計画することができた。 ○生徒の実態や社会全体の傾向い合わせた「主体的・対話的で深い学び」を育成するための授業展開を構築していきたい。
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
				A	
	各科共通	基礎・基本の内容を体験を通して理解させ、問題を見つけ、よりよい生活に変えていこうとする態度と生きる力を育てる。	○実験・実習内容を工夫と精選をし、知識と体験の定着を図る。 ○各分野における変化や問題を自分事として捉えられるように、高校卒業後の自分の人生に反映していこうとする態度が身につく授業の展開を図り、自ら学び自ら考える力を育てる。	B	
		各分野の関連性・重要性を見だし、日常生活と比較させることで、主体的・総合的に生きようとする意識・態度を育てる。	○夏休みに各家庭で実施するホームプロジェクトでは、4月からの授業の中で全員が計画的に進めていけるように支援し、日常生活の中の問題点・改善点を認識させ、生活の質の向上に結びつくように工夫する。	A	
情報	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	○情報分野に興味のある生徒とそうでない生徒の格差を感じている。情報社会の一員として生きる生徒達にさらなる意識の高揚を図っていきたい。 ○授業はスライド等を用いておこない、分かりやすさを心掛けた。また、授業で使ったスライドは生徒達と共有し、生徒が復習や自主学習に活用できるようにした。 ○授業内容は精選し、効率的・効果的な内容にしていきたい。 ○引き続き、研修等で研鑽を積んでいきたい。
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進捗や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A	
				B	
	各科共通	学習活動を通じて、情報モラルに対する知識・理解を深め、状況に応じた適切な行動ができるようにする。	○授業等において多様な手段(動画視聴や事例検討)を用い、生徒に当事者意識を持たせて、情報モラルが着実に定着するよう指導する。	B	
		共通テスト新規実施科目として、最新の情報収集に努めるとともに、生徒がそれぞれの希望進路に応じた学力を身に付けられるよう指導する。	○共通テストに関する最新情報の収集をおこない、教科における指導等を通じて生徒に還元する。 ○情報科関連の授業がない「空白の1年」にある2学年生徒に対し、次年度へ向けた効果的な学習支援をおこなう。 ○「基本情報処理検定」や、センター試験や共通テストで出題された「情報関係基礎」の問題分析をおこない、生徒に還元する。 ○新学習指導要領のねらいに基づき、授業の中で生徒が主体的、対話的で深い学びができるようなワーク(作業)を取り入れる等工夫をおこなう。 ○クラウドの活用や、オンライン教材を用いて、生徒がその習熟度に応じた学習ができるようにする。	B	
				B	
		生徒が情報科で学んだことを、日常生活の中で積極的に生かし、情報社会に主体的に参画できるようにする。	○Google Workspace for Education の活用など、情報科で学習したことを生徒が他教科や特別活動において効果的に活用できるよう支援する。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
教務	授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業の不均衡にも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、定期考査間の授業時数の均一化をはかる。また、夏季課外を円滑に実施する。	B	○翌日以降も休む可能性のある教員の授業変更案を策定し、生徒に該当科目の教科書を用意させ、自習を大幅に減らすことができた。一方、インフルエンザの流行による学級閉鎖時のオンライン対応には課題が残った。
	授業内容のさらなる充実を図るとともに、併せてICTの活用を推進する。	○60分6時間の授業をより充実したものとするため、研究構想部と協力し、教員相互による授業研究などを実施する。また、ICTを活用した授業展開を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実にも努める。	B	○年間を通して授業公開を行うことになったり、生徒による授業評価アンケートが実施されるようになったりと、新しい取り組みが始まった。アンケート評価が高く、模試も好成績なので、これを維持し、さらに向上させたい。
	令和5年度以降の教育課程の検討をする。	○新学習指導要領に基づいて、単位制を活用した、より教育効果の高いカリキュラムの構築を目指すとともに、大学入試制度の変更を踏まえて教育課程の検討を行う。また、医学コースの設置や中高一貫教育校に向けて各教科・分掌と連絡を取りながら教育課程を検討する。	B	○新学習指導要領に対応した教育課程編成表は完成したが、観点別評価の基準や内容についてはまだ検討が必要である。共有フォルダで各教員が閲覧することができる体制を整備したので、学校全体での改善を図りたい。
	教育活動を公表する。	○学校説明会委員会や研究構想部と連携して、中学生対象の水戸一高説明会の実施により、本校の教育活動を公開する。また、同時に、学校公開やホームページを通して、地域住民等に広く水戸一高の教育理念を周知する。	B	○学校説明会も学校公開も、たくさんの来場者を迎え、盛大に実施することができた。ホームページの更新については、従来からの情報部との連携に加え、新しく発足した情報委員会とも連携を深めたい。
	統合システムを円滑に運用する。	○校務支援システムの円滑な運用を進めるために、随時、管理体制の見直しや、活用法の研究に努める。また、システムの効率的運用で教員の授業研究時間の増加を見込む。	B	○システム担当者間の連携や教務と学年の連携を密にし、円滑かつ効率的な運用を進めることができた。新教育課程が最終年度を迎えるので、最新の情報を共有し、学習指導要録や調査書も適切に作成していきたい。
	学校行事を各分掌、該当学年と連携して円滑に実施する。	○入学式・卒業式を、関係する学年や各分掌と連携、協力して円滑に実施していく。 ○新型コロナウイルス感染症収束後も、適宜、各行事の企画・運営にICTの活用を図る。	B	○新しい体育館への対応や長いコロナ禍による情報共有の断絶など、困難を抱えながらも、円滑に実施することができた。ICTの活用も充実させたい。
	奨学会関係の事業を、各分掌や各学年と連携して円滑に進める。また、同窓会との関係を深め、諸事業に協力する。	○奨学会との連携・連絡を適切に行い、奨学会総会並びに奨学会役員会の企画・運営を、各分掌や各学年と協力して円滑に進める。 ○保護者や学年への連絡・報告を適切に行い、様々な学校行事が円滑に進められるように内容を工夫・改善する。 ○同窓会との連携・連絡を適切に行い、諸事業に協力していく。 ○高等学校PTA連合会関連行事を用いて、本校教育活動の発信に努めていく。 ○学校内外の状況変化に対応した各行事の企画・運営について研究を進める。	B	○奨学会総会の内容や時間を見直し、短いながらも充実した会を実施することができた。 ○同窓会との連携は、創立145周年記念講演会や歩く会など、多くの場面で大きな成果を発揮した。これからも連絡を密に取りながら協力を依頼し、各行事のいっそうの充実を図りたい。
	奨学金関係事務を適正に実施する。	○奨学金関係の事務および奨学生の選考に関する事項等を、ICTも活用しながら適切に行う。	B	○各学年と連携しながら適切に進めることができたので、今後もこの状態を維持したい。
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実させる。	○各委員会生徒と密接な連携を図り、明確な活動計画の基で各行事の運営を行う。 ○天候やその他の理由により計画通りにいかない場合に、適切な判断ができるよう、あらゆる事態を想定しリスクに備えるとともに、柔軟な生徒へのケアをおこなえるよう準備しておく。また、天候に左右されない計画を考えることにより、学習時間とのバランスをとる。 ○積極的な生徒会活動への参加を促し、主体的な運営ができるよう指導する。その活動の中で、集団を率いることのできるリーダーを育成する。 ○学習活動や他の諸活動とのバランスをとり、学校行事の満足度85%以上を目指す。	B	○クラスマッチの雨天時対応が課題。天候に左右されずに開催できる方法を確立する必要がある。 ○学苑祭、歩く会の予算の見直しも課題。コロナ以降の不安定な計画から、コロナ以前の計画に戻すには、様々な支出が増えることになることから、奨学会からの予算を増額してもらう必要がある。 ○コロナにより、行事の在り方が未だ不安定であり、様々な課題を柔軟な発想と生徒の意欲向上によって乗り越えていく必要がある。
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○部活動と学習活動を両立している生徒の割合、80%以上を目指す。 ○各部活動で主体的な運営になるよう導き、リーダーとなる人材を育成する。 ○各団体の設備、備品の管理を徹底させる。 ○限られた時間の中で、最大の効果が得られるよう計画性をもった活動になるよう指導する。	B	○主体的かつ、効率的な部活動を目指し、活動予定表と実績表を活用しながら、計画的な活動になるよう、各団体に意識付けが必要。 ○中学部活の活性化のためには、高校部の顧問および生徒の理解と、協力・連携体制を強化していく必要がある。
	HRにおいてキャリア・パスポートを活用する。	○各学年のHRにおいてキャリア・パスポートを作成し、社会の中での自身の在り方を考える。	B	○引き続きキャリアパスポートの有効的な活用方法を研究していく必要がある。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
進路支援	生徒一人ひとりが高い進路目標を持つことを推奨し、一人でも多くの生徒が進路実現できるように支援する。難関大学(東北大、東京大、東京工業大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大)の一般選抜(前期日程)において35名以上、医学部医学科において15名以上の現役合格を目指す。	<p>○1・2学年と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。</p> <p>○コロナウイルスの影響で不確定な要素があるが、生徒が大学のオープンキャンパス(WEBも含めて)に明確な目的意識のもとで積極的に参加し、得たい情報を自らすすんで獲得しその活用がはかれるよう、学年との連携のもとで事前・事後の支援を強化するなど、その支援の在り方の工夫に努める。</p> <p>○東大を含めた難関大の研究を通じて、「難関大研究会」の機能をさらに強化し、学年間の情報共有に努め、進路希望の実現に結びつける。</p> <p>○大学入学共通テストに関して、学年や教科と連携し、定期考査等での出題の工夫をはじめとして新傾向の問題へ十全な対応を進める。</p> <p>○医学コース関連のプログラムを円滑に実施し、キャリア教育と学力増進の両面で医学科を志望する生徒への支援の充実を図る。</p>	B	<p>○進路意識の高揚については、1・2学年団による積極的な生徒への働きかけが年間を通じて計画的に実施され、十分にその目標を達成できた。また、オープンキャンパスについては、2学年を中心に丁寧な支援をしつつ、夏季休業中に多くの生徒が参加した。次年度についても、個に応じたより効果的な支援の工夫が必要である。</p> <p>○予備校等から集めた難関大に関する各種の分析データを学年に提供し、学年では生徒の状況と照らしながら東大研究会を中心とする難関大研究会等が、各学年各々の問題意識を反映した形で、新たな取り組みも交えて効果的に実施された。</p> <p>○大学入学共通テストについては、教科において対応が進んでいるものの、今年度の問題についてももしっかり分析した上で、個別試験への対応を柱としつつ、しっかりと調整を図っていく必要がある。</p> <p>○医学コースの事業については、予定通り効果的に行うことができた。次年度もより効果的かつ効率的な支援を工夫していきたい。</p> <p>○KPI数値目標の達成度については、3月の結果を待つ。</p>
	学年と連携をし、生徒や保護者に講演会やガイダンスを通して、進路情報を提供する。	<p>○学年と連携し、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、保護者対象の進路講演会や医学部進路講演会等も実施し進路情報の提供に努める。</p> <p>○生徒・保護者・教員の3者にとってより有益なものとなるよう「進学資料」、「進路の手引き」の改良に努める。</p>	B	<p>○学年との連携のもとで生徒対象の進路講演会を、それぞれ目的に応じて実施した。1・2学年については個別に保護者対象の進路講演会も実施し、多くの保護者が参加し、変わりゆく入試制度のその方向性や現状について、最新の情報を提供することができた。○1・2年生の医学部志望生徒の保護者を対象として、「保護者向け医学部講演会」も実施し、医学部入試の現状や医学部の実態等についても伝えることができた。</p>
	生徒のデータを3年間通して見渡せる進路情報システムの改良と、その活用への環境整備を進める。	<p>○3年間の学習成績と最終的な大学の合否がリンクした形でのデータベース「佐々木システム」について、今年度も新たにデータの更新を行い、職員研修等を実施し、進路支援における有効活用をはかる。またこのデータベースを活用して支援に有効と思われる出力形態についても研究を進め、活用の幅を広げていく。</p> <p>○現役時はもちろんのこと浪人した生徒も含めて、進路確定まで継続的な支援を行う。</p>	B	<p>○第3回校内模試や1・2年次の実力テストの成績と、現役時及び浪人時の大学の合否が、大学、学部、学科別等で検索できるシステムが一昨年度完成し、今年度はその活用を進めることができた。今後もデータを追加・更新し、さらに利用しやすさと信頼度を高めていきたい。○4学年による浪人生への激励会が年2回実施され、また、個別の相談にも対応することができた。</p>
研究構想	新「チャレンジプロジェクト(県事業)」の初年度として、事業を軌道に乗せる。	<p>○「心に火をつけるフォーラム」、「文理・融合講座」、「探究力向上セミナー」、「キャリア探究対話」、「GRITセミナー」、「東大探訪」等の行事を異なる学年とともに経験し、生徒自身の在り方や生き方、進路について考えを深める。</p> <p>○「知道プロジェクト発表会」をとおして課題発見力を高め、多視点からの論理的考察力や、他者への伝達力、研究態度を培う。「パブリックリーダースクール」等の行事により、将来において社会貢献のできる人間育成を目指す。</p>	A	<p>○「心に火をつけるフォーラム」におけるムハマド・ユヌス博士をはじめ、各種セミナーを+4学年をはじめとする新たな行事を、充実した講師陣により実施することができた。運営面については、今年度の経験を踏まえ、より効率的・計画的に実施できるよう、工夫していきたい。</p> <p>○また、各種行事について、総合の時間や道徳の時間等との関連性を高めていくなど、より一層教育効果が上がるよう、さらに改善していきたい。</p>
	教員の授業力向上を図る。	<p>○「新任者授業見学会」、「校内授業公開」による校内での実践研修および、「筑波大学附属高校等の教育研究大会」、「駿台教育研究所の教育研究セミナー(含オンライン)」、「Find!アクティブラーナー(オンライン研修)」等による学習指導法研修を行い、質の高い授業を研究する。</p> <p>○「校内教員研修会」、「県外進学校視察」等を行い、難関大学進学指導やHR経営等の知識やノウハウを蓄積・継承する。</p>	B	<p>○本年度より、年3回以上の校内授業公開を全教員の目標として設定し、実施した。また、授業改善推進チームが発足した。これらの活動を一層推進し、授業力の向上を図るとともに、県外先進校視察や教育研究大会へ教員を引き続き派遣し、広く全国から得た最新情報・動向を授業等に還元していきたい。</p>
	開かれた学校づくりを推進する。	<p>○中高連携や、他中学・高校・高大連携を推進し、相互に連携・交流を深める。</p> <p>○「学校公開」や「道徳公開授業」を行い、本校の教育活動や取り組みを広く周知する。</p> <p>○「知道プロジェクト発表会」は、学識経験者等の第三者に見てもらい客観的立場から意見をいただく。感染拡大状況によるが他校教員や保護者来場・評価も検討する。</p>	A	<p>○+4学年活動を中心に中高連携を進めるとともに、高大連携についても、東大9名京大9名などトップレベルの大学から講師を招へいするなど、高大連携も進めた。中学生による「水戸一ノ道」紹介(総合的な学習の時間取り扱い)など、地域との連携も図ることができた。</p> <p>○「知道プロジェクト発表会」では、生徒の探究活動について客観的評価・援助を得られるよう、本年度に続き学識経験者を招聘していきたい。</p>
	充実した教育活動により、未来を担う人間を育成する。	<p>○「総合的な探究の時間」をとおして進路意識と探究心を刺激し、自らの将来像を考えさせる。</p> <p>○「道徳」「道徳プラス」をとおして、道徳的判断力や実践意欲・態度を育成する。</p> <p>○『課題研究優秀論文集』、『海外派遣プログラム報告書』、『紀要』等を作成し、当該生徒は年間の学習成果の確認、学校全体としては共有化、後年のための資料化などにより教育活動の充実に資する。</p>	B	<p>○本分掌で作成する報告書について、電子媒体化、発刊時期の柔軟化、他分掌への移譲などにより、現状に沿った内容へ改める検討を進めること。</p>

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
生徒支援	基本的な生活習慣の確立を図る。	○挨拶の励行。日常生活の様々な場面で積極的に挨拶を行うようにする。 ○校外・地域等に貢献・奉仕しようとする意識を持たせ、自主的に行動できるようにする。 ○規範意識を高め、水戸一高生として誇りの持てる行動をするように指導、支援する。	B	○ほとんどの生徒は挨拶などの基本的な生活習慣が確立、定着しているが、一部の生徒に不十分さが見受けられる。また、次年度の課題として、校内だけでなく、校外でも水戸一高生としての自覚を持ち、他の模範となる行動がとれるように指導していきたい。
	学校生活の安全を図る。	○思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高生としての自覚と責任ある行動を取るようになる。 ○各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、生徒の状況を正確に把握し、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○スマートフォン依存症防止のために、スマートフォン等の適切な使用法を指導する。 ○インターネット上で個人やグループに対する誹謗中傷や、SNSでのいじめ、仲間はずれ、個人攻撃などをしないように指導する。	B	○全体として「他者を思いやること」、「水戸一高生として自覚のある行動を取る」ことができ、落ち着いた学校生活を送ることができている。スマホ活用のルール作りを年度当初に行うことで、SNS上でのトラブルの訴えはなかった。高校1年生を対象とした薬物乱用防止教室、地域の防犯パトロールなどを実施し、安全な学校づくりに結びつけることができた。ただ、盗撮などが疑われる事案も発生しており、今後は各学年や他の部なども連携し、学校としてより一層適切な対応がとれるように取り組んでいきたい。
	交通安全の意識を向上させる。	○自転車は車道の左側通行など、交通法規の遵守を徹底させる。 ○自転車による交通事故ゼロを目指す。自転車を運転する際にはヘルメットを着用し、スマホやイヤホンを使用しながら運転をしないなど、安全な自転車の乗り方を指導する。	B	○警察や地域の方々と連携した交通安全のキャンペーンなどを実施することができた。ただ、自転車における交通事故も7件発生している。引き続き、注意喚起を行い、交通事故0を目指していきたい。また、自転車乗車時のヘルメットの着用率もまだまだ高いとは言えない状況である。こちらも引き続き、啓発活動などに力を入れ、ヘルメットの着用率を上げていきたい。
	いじめ問題に適切に対応する。	○いじめの未然防止に努め、いじめのない学校を目指す。 ○いじめを早期発見するために、各部署との連携を図り、職員全体で情報を共有する。 ○教職員対象に資料提示を実施し、いじめに対する意識を高める。 ○インターネットの適切な利用を指導することで、SNS上のいじめを防止する。	B	○いじめ対策会議を定期的開催し、情報を共有することでいじめの未然防止や適切な認知・対応につなげることができた。アンケートも定期的実施するとともに、「こころからだのチェックシート」を夏以降導入して計5回実施し、生徒の心身の健康を観察し、支援につなげると共に、学校が運営、管理するオンライン相談窓口を開設し、いつでも悩みを相談できる体制を作ることができた。これらを活用しつつ、生徒が安心・安全に学校生活を送れるよう、支援していく。
情報	校内ICT環境の改善・整備を適切に行う。	○GIGAスクール構想に基づき、適切な教育が進められるようICT機器の更新や整備をおこなう。 ○情報委員会(新設)生徒が校内ICT環境の改善について適切な提言をし、それが実行できるよう支援する。	B	○先生方もICT機器の使用に馴染んできた印象がある。校務用PCの更新を行うことができ、さらに先生方に充実した教育をおこなっていただけよう、進めていきたい。 ○情報委員会は現在活動内容等の見直しを行っている。
	学校情報発信の充実を図る。	○情報委員会生徒が、適切な情報発信をできるよう支援する。 ○Webページの改編に情報委員会生徒のアイデアを生かす。	B	○情報委員会は発足したばかりで、色々と課題が出てきている。生徒のこれからの活動を期待し、支援していきたい。
	教育の情報化へ向けた支援活動を行う。	○教員が教育の情報化を適切に進められるように、ハードウェア、ソフトウェアの両側面から支援する。 ○他分掌、学年との連携を強化し、情報部として可能な支援を引き続き推進する。 ○情報セキュリティについて、生徒や教員に対して個人情報の厳重な管理やウイルス対策等について、注意喚起・情報提供をおこなう。	B	○ハードウェア、ソフトウェアについては、内容充実のために整備をおこなった。さらに要望に応えていきたい。 ○他分掌・学年との連携は順調である。 ○情報セキュリティについては、引き続き、先生方に注意喚起や情報提供をおこない、意識の高揚を図っていきたい。
	効果的な学校評価アンケートを実施する。	○学校評価の質問項目を見直し、より学校運営に生かせるような形にする。 ○保護者からの回収率を上げる方策を実施する。	B	○アンケートの自由記述については、各分掌・学年と共有し対応をお願いした。 ○アンケート回収率は過半数がやっつであり、回収率の向上が課題である。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
図書	生徒の課題発見と探求活動を支援する図書館として一層の充実を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> ○図書管理・検索システムのアップデート情報に留意し必要な場合は適用を検討する。 ○教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出し利用に繋げる。 ○選書について、多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ扱い、中学生向け選書にも配慮をしてゆく。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○図書検索システム「カーリル」の導入により、館外で蔵書検索が可能になったが、利用率が低いと広報に努める。 ○授業進度に合わせた展示が不十分だった。各学年の授業内容の把握に努めるよう工夫する。 ○リクエスト制度、店頭選書の実施などで生徒の興味関心に対応した選書を行うことができたが、利用者や図書委員会の嗜好に偏る傾向にあるため、蔵書配分を確認しながら選書する。
	読書体験の機会を設け意識を高め、読書に親しむ生徒の増加を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○総合的な探究の時間(課題研究)での利用をはじめ、生徒一人ひとりの学習で一層の図書利用が進むように館内POP展示・新蔵図書紹介を進める。 ○読書会、ビブリオバトル等のイベントを感染状況に留意しつつ開催準備を進め、生徒同士の読書体験の共有・啓発運動を行う。 ○各種読書コンクールへの積極的応募を勧め、校内表彰とあわせて読書への興味をさらに高める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○各学年の総合的な探究(学習)の時間担当教員と連携し、目的に沿った資料収集及び展示を実施することができたが、利用が少ないため、展示の他、ブックリスト作成、HP等で情報公開など、広報に努める。 ○中高合同のビブリオバトルを実施することで、読書意欲の向上、他学年との交流が実現できた。ビブリオバトルに限らず、読書会、ブッククラブなど、多様な情報交換の機会を増やしたい。 ○コンクールへの参加がたいへん少なかった。国語科、美術科等と連携し、教科推薦図書収集、広報に努める。
	生徒委員会が可能な範囲で最大限充実した活動となるよう支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○毎日のカウンター当番等を活動の基盤としながら、学苑祭・読書会運営、機関誌編集などを主体的に運営できる生徒の育成をめざす。 ○イベントの方式や規模を従来にただ戻すのではなく、デジタル機器の利用等、新たな形で実施が可能なかを検討する 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○前期後期との後半のカウンター当番が不在になる傾向にあるため、最後まで責任を持って努めるよう指導する。 ○Googleクラスルームを活用した委員会活動を実施することができたが、確認が漏れる生徒もいるため、さらにスムーズに活用できるように継続活用する。
	機関誌発行で生徒に編集体験を積ませ、年報発行で本校の歩みを記録する。	<ul style="list-style-type: none"> ○図書館報2誌の制作について、生徒を編集に参画させ計画的に発行する。 ○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に進行。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○年度毎に頁数等の規格が変わってしまうため、統一された規格で毎年発行する。 ○原稿を期限内に提出しない生徒がいるため、発行が滞った。発行日を意識し、PDCAサイクルを自主的に考案し、責任を持って活動するよう指導する。 ○図書館報をより中高連携を意識したものにする。
保健厚生	学習環境の整備に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○清掃箇所をクラスや部活動等の団体に適切に分担し、校舎内外の美化に努める。 ○引き続き新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の対策をおこなったうえで、衛生状態が保たれるよう取り組みを徹底する。(教室のゴミ箱を使用させない等) ○清掃用具やカーテンの劣化や衛生状態、適切な数量・道具がそろっていることの確認と交換・補充、石けんや洗剤の適切な補充を行う。 ○教室等の空気・照度検査、飲料水の水質検査、ダニの検査等を実施する。 ○施設・設備の安全点検を行い、学習環境の安全の確保を図る。 ○カウンセリング室設置に伴い、部屋の整備・利用調整を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○清掃場所に応じた適切な掃除用具を準備する。 ○教室のカーテンの破れや劣化を確認し、順次交換していけるようにする。 ○夏の熱中症対策について、今年度から各活動場所に熱中症計を貸し出した。来年度も引き続き熱中症の予防対策を徹底する。 ○引き続き各衛生検査を継続すると共に、教室におけるCO₂濃度の測定と、サーキュレーター併用による換気を徹底し、クラスター発生を予防する。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○事故等の未然防止のために、担任や養護教諭等を中心とした保健指導を、適宜行う。 ○引き続き新型コロナ感染症感染予防を徹底し、生徒の必要な心のケア等につとめる。 ○各学年、生徒指導部、スクールカウンセラー等と連携し、生徒の心身の健全な育成につとめる。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」を、毎月1回発行する。 ○災害時における避難訓練を防災に対する意識を高めるよう指導する。また、休日や校外においても緊急事態に対応できるよう意識づけを図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○スクールカウンセリングの希望者が増加しており、実施回数を確保すること、担任や学年による予備面談の必要性がある。(ある程度内容を共有し割り振りできるようにする) ○年2回実施の防災訓練のうち、少なくとも1回は消防署員派遣を申請する。年度当初に予約が必要である。また、職員向けの消火訓練等も実施する必要がある。 ○災害時の備蓄品の整理と、必要数の確保を引き続き行う。 ○年度当初に、新学年における避難経路の周知徹底をする。 ○新高校1年生について、附属中学校からの個人情報等が適切に引き継ぎされるよう各係と連携を図る。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
1 学年	規範意識を高め、基本的な生活習慣の確立を図る。	○日常の挨拶を定着させるとともに、5分前行動など、時間の管理を徹底させる。 ○規範意識を高め、場に応じた行動をとれるようにする。 ○環境整備・清掃活動の活性化を促す。 ○SNSやICT機器との向き合い方を身に付けさせる。	B	○遅刻・欠席者が少なく、落ち着いた学校生活を過ごすことができた。支援を要する生徒については、学年団で情報を共有して、養護教諭やスクールカウンセラーなどの関係職員と連携をとりながら対処を続けている。 ○SNS・情報機器の使用については大きなトラブルは顕在化していないが、授業時間外における活用状況など、改善が必要などあるところもある。定期的に声かけをおこなって、成長を促したい。
	基礎基本を徹底し、確固たる学力の土台をつくる。	○学校の授業を中心に、「予習」「授業」「復習」のサイクルを確立させる。 ○授業公開や情報交換を積極的にに行い、授業の質を高めていくなかで、生徒の学習意欲の向上につなげる。 ○生徒の知的好奇心を大切に、適切な進路情報を提供することで、進路希望・適性に沿った文理選択を促す。	A	○前向きに授業にのぞみ、課題に対しても丁寧に取り組む生徒が多い印象である。学年団で課題の量や頻度をコントロールしながら、与えられるのではなく、自ら選択して学んでいく姿勢を身に付けさせていきたい。 ○文理・融合講座など学校内外のワークショップに意欲的に取り組む生徒が多かった。更なる学びにつなげていけるよう支援していきたい。
	自己理解を深め、互いに高め合いながら主体的に行動できる集団になる。	○部活動や委員会、学校行事やボランティア活動への参加を通して、他者との自発的な交流を図る。周囲への敬意や感謝の気持ちをもって生活できるようにしていく。 ○自己と向き合いながら、小さな課題を解決していくことで、自分自身を大切に育てるとともに、自己有用感を獲得させる。	B	○体育館の椅子並べなど学校行事の裏方作業の場面では、労することを嫌がらず前向きに取り組む生徒が多かった。 ○生徒会や委員会にもチャレンジする生徒も増えてきた。様々な価値観をもつ他者と交流を重ねるなかで、広い視野や周囲への敬意を身に付けていってほしい。
2 学年	高校生活を送る上での基本的な生活習慣を確立する。 規範意識を醸成する。 平等で公平な指導を行う。	○時間厳守(提出期限・集合時間・投稿時間)と挨拶を励行する。 ○いじめにつながる場面や可能性を速やかにとらえ、その状況を放置しない。SNS・情報機器の扱い、環境整備・清掃を徹底する。 ○SHRでの均一的で統一的な指示・連絡をする。学年朝会を行い、必要な伝達事項と業務を点検する。	B	○2年次は「中休み」が懸念される年ではあるが、概ね落ち着いた学校生活を送ることができた。また、挨拶・コミュニケーションをしっかりと交わせる生徒も多い。 ○SNS・情報機器の使用を巡るトラブルはなかったが、スマホやネット依存が高い生徒も少なくないので、継続して指導を重ねていきたい。 ○学年朝会を実施し、各HRでの均一的で統一的な指示・連絡が行えた。
	高等教育を受けるための基礎的学力の育成を図る。 学力偏差を最小にする。低成績層への支援と声掛けを行う。 学問系統選択への支援を行う。 授業力の向上を図る。 観点別評価の研究と実践に努める。 医学部・共テ「情報」、総合型選抜、学校推薦型選抜動向の研究と生徒・保護者への情報提供を行う。 課題研究への支援を行う。	○「教養」「抽象的思考力」を意識下に教授内容を研究・計画する。 ○生徒の学習状況・成績状況をスタッフ間で共有し、声掛けの材料を不断に仕入れる。 ○進路希望・適性に沿った学問系統を選択させる。OC情報の提供、進路講演会の企画、OB講師の活用を進める。 ○授業公開の促進、教科間連動の教材研究に努める。 ○考査作問(教授内容)と評価との明示的なつながりを持つ。 ○「学年通信」他、保護者連絡網(週1回)、学校評価アンケート結果へ対応する。 ○自ら学ぶための環境作りを支援し、大学講師、OB講師を活用する。	B	○学力の標準偏差が(1年次と比較し)やや広がったが、高2生として修めるべき基礎学力レベルは概ね達成できた。 ○模試結果をもとに出願検討会を実施した。個別生徒の成績状況・進路希望及びその適性について、学年スタッフ間での共有が深化した。 ○新教育課程・観点別評価の下、学年スタッフ間で、指導と評価の一体化に関する研究と情報交換を行った。引き続き、授業者と生徒がともに納得的な評価の在り方を探っていきたい。 ○「学年通信」計12回、保護者連絡網(週1回)を実施した。また、夏季・秋季保護者面談では、全保護者と面談を実施した。今後も、開かれた学校、学校教育活動の「見える化」を通じて、保護者の学校教育活動への理解と協力をいただきたい。 ○外部講師による様々な講演の機会を通じて、生徒は自身の将来像をより具体的に描くことができた。
	コミュニケーション力の養成を行う。 特色選抜入学生への支援を行う。	○「入番(学校行事・部活動・委員会活動・海外からの学校訪問受入等)」の機会を増やし、生徒の自己肯定感を上げる支援をする。 ○部活動顧問との情報共有、学習状況の継続的調査(及び学習支援)、校内外行事で中心的役割を担える環境を醸成。	B	○学校交流事業の一環で実施した「台湾大理高級中学校訪問」の際に、歓迎式典を生徒が主体的に企画し運営を行った。また、学年レクリエーション等においても、生徒が主体的に取り組む姿が認められた。 ○部活動と学習の両立を高度な次元で実現している生徒が多い一方で、学習面では取り組みに課題のある生徒も見られる。県教委が定める枠組みの中で、より良い両立の在り方について、今後も検討をしていく。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
3 学 年	高い進路目標を掲げ、その実現に向けて妥協のない自己修練を促す。難関大学(東大・京大・阪大・東北大・名大・東工大・一橋大)や医学部医学科をはじめ、生徒の第一志望実現を支援する。	○進路情報を精査し、高い進路目標を設定するための指導・支援を行う。 ○授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進する。 ○最後までやり抜く力の育成や進路実現にむけた意識醸成のための指導・支援を行う。	B	○継続的な個別面談により生徒の進路志望動向を詳細に掌握し、個々の進路指導に資することができた。 ○今年度の入試環境や全国の志望動向について、適切な時期に生徒へ情報を提供し、現行課程入試に臨む最後の学年ではあるが、安全志向になることなく多くの生徒が志望する大学に進学した。 ○GRITセミナーを年2回(前後期各1回)実施し、志望大学に向けて最後まで諦めることなく取り組み、進路実現を果たそうとする意識を醸成した。
	親和寛容の精神を涵養し、精神的自律を図る。	○自らの在り方・生き方に対する指導・支援を行う。 ○個性や才能を伸ばし、社会貢献しようとする進取の精神の獲得にむけた指導・支援を行う。 ○社会の一員としての教養と品格を獲得するための指導・支援を行う。	B	○水戸一高の伝統を継承する意図のもと、学校行事、部活動、委員会活動等、学校生活全般にわたり主体的かつ意欲的に取り組む姿勢が見られ、その経験が精神的自律を促した。 ○社会の一員として自身の在り方・生き方を模索する契機となるよう、生徒個々の個性や才能の伸長に繋がるよう、特別活動の在り方については今後更に検証していく必要がある。
	規範意識および基本的な生活習慣の確立を図る。	○実社会に通用する普遍的な規範意識確立のための支援を行う。 ○学校生活における時間厳守、挨拶・清掃活動の励行を促進する。	A	○平素より時間の厳守・挨拶・清掃活動を励行しており、基本的な生活習慣を確立することができた。また、入学当初は他者との意思疎通に苦手意識を持つ生徒も多く見受けられたが、教員や上級生・級友等の多様な他者との関わりの中で相互に認め合い、落ち着きある人的環境が醸成された。 ○生徒は概して規範意識が高く遵法性に富んでおり、将来実社会において、さらに多様な価値観に晒された際にも変わらぬ姿勢で臨むことが期待される。

※評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない